

【翻 訳】

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (4)

—— エドモンド・デ・アミーチス ——

氏 家 伸 一

訳者前書き

エドモンド・デ・アミーチス（一八四六一—一九〇八）の名は、我が国では「世界少年文学の傑作」『クオーレ』（『愛の学校』）の作者として知られている。その中の一部は『母を尋ねて三千里』の題名のもとに独立して邦訳され、多くの人々の心に深い感銘を与えた。『クオーレ』（英語のハートに当る）という表題の示す通り、デ・アミーチスは一般庶民に対する深い愛情に満ちた博愛主義者、そして誠実な作家であり、文字通りクオーレの人であった。ミヘルスの言葉を使えば「人民の友、人民の子」であった。本評伝は、デ・アミーチ

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (4) 氏家

スが社会主義支持を表明した時の人々の驚きや、彼の死に際して小学生から国王までが深い悲しみにとらわれたということについて報告しているが、それは彼が全国民に愛された作家であったことを理解せしめるに十分であろう。（『クオーレ』紫田治三郎訳・旺文社、解説参照）

さて、ミヘルスが本評伝においてデ・アミーチスを論ずる視点は、イタリア社会主義運動の歴史に占めるデ・アミーチスにある。デ・アミーチスが社会主義に転じ、再びそれから離れていく過程の叙述が本評伝の特色である。そして、デ・アミーチスのケースがある程度普遍的な意味をもつ限り、本評伝は我々にとっても価値をもつといえよう。

(三三九) 六九

『マルクス主義の歴史』第二卷『第二インターナショナルの時代のマルクス主義』(“Storia del Marxismo,” Volume secondo, “Il marxismo nell’età della Seconda Internazionale,” *Guido Einaudi editore.*)によせたホブズボームの論文「世紀の交わり期におけるヨーロッパ文化とマルクス主義」は、ドイツ、フランス、イタリア、ロシアにおける知識人とマルクス主義の関係を比較しているが、それによると、イタリアの社会主義運動において知識人の果たした役割は例外的なほど広範囲にわたり、しかも顕著であり、少なくとも一九世末まで、イタリアの知識人にマルクス主義が与えた影響は絶大であった。「恐らく他の国では、著名な科学者、研究者、作家の中にかくも多くの社会主義者を見出すことはできないであろう」という証言もある。(R. Hunter, *Socialists at Work*, New York 1908. *Erie J. Hobspawm*, “La cultura europea e il omarxismo fra Otto e Novecento,” p. 80. に引用)それは青年や学生のみならず、一八三〇年代、四〇年代生れの壮年についても言えることであり、ホブズボームはその代表者としてアントーニオ・ラブリオーラ、ロンブローゾ、そしてデ・アミーチスをあげている。政治の世界よりもむしろアカデミックの世界でマルクス主義の影響力が

大きかった理由として、彼は、当時のイタリアの大学を支配していた進歩主義的な雰囲気になんか合致したからであると説明している。マルクス主義は、彼ら知識人の属する中間階級の、根本的に実証主義的、進化論的、反教権的な文化というサラダを味つけするソースの如きものであったという。

このような精神的、文化的環境の中でイタリア・マルクス主義は一つの特徴を持つことになった。ミヘルスは「イタリア社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー」論文の中で、「イタリア社会主義の独得の特性はその倫理的刻印にある」として、「イタリア社会主義における倫理的契機の優位」という一節を設けているが、そこで彼は一九〇四年のデ・アミーチスの文章を引用している。それは先の特性をよく表現しているので、次に紹介しておこう。

「そしてこの集会からは、いまだ最後の疑惑にとらわれてはいるものの、新しい良心を持ったブルジョアジー、それまでは知らなかった心の静謐を感じたブルジョアジーの新たな改宗者が誕生したのである。青年達はそれまでの気楽な状態にはなじまない思想にとらわれ、壮年達は心情と精神を若返らせ、皆、深い喜びの感情におそわれた。それはまるで、今出てきた集会の中では、善について語られるば

かりではなく善が行なわれ、人類の利益になるための活動がなされ、真理と博愛と正義の聖なる種子が未来に向ってふりまかれたかのようにであった。」

ミヘルスはこのような倫理的な動機に基づいて社会主義者になったデ・アミーチスを「真的社会主義者」、「宗教的社会主義者」と呼んでいる。そして、この「イタリアの巨匠」、倫理的社会主義者デ・アミーチスの本質をドイツ人に理解してもらうには彼の創作を読んでもらうに越したことはないとして、三つの短篇と一つの短い文章を付録として独訳しているが、同じことは我々にもあてはまると思われるので、そのまま邦訳することにした。現代の読者は、そこで表現された、人間の「善良な側面」への愚直なほどの信頼に驚かされるかも知れない。ミヘルスの言い方を借りれば、デ・アミーチスは確かに「先験的なオブティミスト」であろう。しかし、社会主義やマルクス主義を含めて思想そのものが非常に無機化した現代、我々はこのような素朴な人間主義を蔑ろにし過ぎていてはないだろうか。

イタリア社会主義運動の指導層におけるブルジョアとインテリの相対的優位という問題はミヘルスの社会学的研究の重要な主題であった。一九〇四年のゼネスト(史上初の、とミ

(ヘルスはつけ加えている)を機にアルトゥーロ、ラブリオリラらを中心とする社会主義左派が登場する。サンディカルズムがそれである。社会主義運動の重心を、議会主義と改良主義の政党、ブルジョアと知識人中心の社会党から、労働者階級の歴史的主体性にのみ基づいた労働組合へと移行させようとするこのサンディカルズムは一般にフランスの労働運動とその理論に起源を有する。フランス・サンディカルズムの独創的理論家ジュールジュ・ソレルはブルジョア・デモクラシーを痛罵して、「民主主義は、知識及び政治の寡頭政によって、生産大衆の搾取を続けようとするのだ」と断じた。(川上源太郎訳『進歩の幻想』ダイヤモンド社、二〇五頁)この言葉はミヘルスも気に入ったようである。(広瀬英彦訳『政党政治の社会学』ダイヤモンド社、三八九頁)

ミヘルスはフランスからイタリアへ移入され、イタリア・サンディカルズムを形成することになった要因を次の四つに要約している。

- (一) 社会党の社会的不純という観念と、そこから生ずる、社会主義運動を編成変えする差し迫った必要性、
- (二) 労働組合には社会主義経済を運営する能力があるとす
る理論、

(三) 場合によっては暴力も必要であるということ、
(四) 大衆の教育手段としてのゼネスト信仰。」

〔Storia Critica del Movimento Socialista Italiano, p. 324.〕

これはサンディカリズムの一般的な必要条件であるが、知識人との関連では(一)の項目、即ち排他的労働者主義 *esclusivismo* が問題である。社会党の社会的不純、つまりその党員、活動家、支持者、投票者の階級構成については、政治社会学の創始者としてのミヘルスが統計的、実証的に分析したことである。そして、この事実に対して社会主義運動を編成変える方向として、フランス・サンディカリズムでいうところの労働者主義(ウーヴリズム)が生じるのである。フランスの反知識人的労働者主義を代表したジョルジュ・イヴトは、労働者の運動を政治的上昇の手段として利用し、頂上になどつりくやそれを裏切った幾多のインテリ政治家、政治的社会主義者に対する健全な憎しみを率直に吐露し、労働者階級の自己への信頼を強く主張している。

「労働者階級は私が既に述べたように、いかなる目的をもつていかなる方法によってどこへいくのかを、知識人よりもよく知っており、独りでやっていく程度には大きくなっ

ている。労働者階級だけが自分自身が何に苦しんでいるかを本当に知っている。」(アンリ・デュビエフ『サンディカリズムの思想像』上村・田中・谷川・藤本訳、鹿砦社、一七八頁)

アンリ・デュヴェフが「厳密にソレル的な革命的サンディカリスト」と呼んだアルトゥーロ・ラブリオーラもマルクスの科学的社会主義(彼は「科学的社会主義などまっぴらだ」とさえ断言した)とサンディカリズムを次のように對比した。

『共産党宣言』はブルジョワジーの頹廃という観点に立ちつつ、革命の可能性を検討している。われわれサンディカリストは労働者の自律性の増大という観点に立つ方を選ぶのである。(同右、二五九頁)

さて、ミヘルスはまさしくこの「労働者の自律性」に関するイタリアの逆説的状况を剔抉したのである。

「八議会主義からの訣別は同時に党内知識人との訣別を意味する。我々が本研究で繰り返してきたように、イタリアの、今述べた意味での反議会主義的な社会主義の提唱者は、端的に、いうところの知識人の腐蝕化傾向を指摘していた。しかしながら、まさに逆説的に聞こえようが、こ

ここで目論まれた知識人に敵対する活動は、少なからず知識人の仕事なのである。」(『Proletariat und Bourgeoisie in der sozialistischen Bewegung Italiens.』 Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik. IV. 47. s. 717.)

このような認識は、他ならぬサンディカリズムの運動にさえオリガキー(寡頭制)の法則が認められるという命題として『政党政治の社会学』(原名は『現代民主主義における政党の社会学』木鐸社版の邦訳名。原著は一九一〇年に第一版が出版された)へと組み込まれていく。フランスのサンディカリストから「われわれの友人」と呼ばれたミヘルスがサンディカリズムへの情熱を次第にうすめつつあることがこの文章から感得できる。サンディカリズムに対する思想的幻滅。彼は続けて「それがどうしたというのか」と、開き直りとも思える言葉を書き残している。つまり、エリート理論からいえばとりたてて驚くべき事ではないからである。

最後に、デ・アミーチス流の倫理的社会主義と革命的サンディカリズム、そしてファシズムとのダイナミックな関係についてミヘルスが弁証したところを紹介しておこう。「科学的客観性」に基づいたと称しながらファシズムへの心情的共感を穏さない一九二五年の『イタリアにおける社会主義とフ

ァシズム』の中で彼はこう論じている。「イタリアにおいて最も活動的で最も理想主義的、そして、いうまでもなく本質的に反民主主義的な社会主義的要素、マルクスのみならずソレルとベルグソンとニーチェに学んだ知識人中心の社会主義的要素、即ちサンディカリズム的要素がファシストの間で強く擁護されている」現象には必然性が認められる。第二インターのマルクス主義体系の決定論と「反英雄主義」、それにデ・アミーチスの精神に充ちた倫理的社会主義によって社会主義的労働者はすっかり「パターのように軟弱」になってしまった。その結果、党の「無気力と希望の無さ」にうんざりした社会主義者の最も戦闘的な分子、つまりサンディカリストはファシズムへと傾斜していったのである。ただ注意しなければならないことは、サンディカリストのすべてがファシストに転向していったのではないということである。ミヘルス自身も付記しているように、イタリア・サンディカリズムの中心的指導者であるアルトゥーロ・ラブリオーラ、エンリコ・レオーネ、エルネスト・チェーザレ・ロンゴバルディは社会党に復帰している。(『Sozialismus und Faschismus in Italien』1925. s. 311-2.)

ともかく、革命的サンディカリズムの系譜のみからファシ

ズムを説明することは一面的である。イデオロギーとしてのファシズムには他の様々な思想が流れ込んでいるからである。しかし、この系譜にこそイタリア・ファシズムの独自性があるということも確かなのである。

エドモンド・デ・アミーチス

Sozialistische Monatshefte, Jahrg. 1908, s. 363ff.

一九〇八年、エドモンド・デ・アミーチスの突然の死去はイタリア人によって国民的な悲劇と受けとめられ、国民的な葬儀がいとなされた。現代イタリア人作家の中でも最も人気のあるこの作家の外面的な履歴の主要な節目——即ち、一八四六年誕生、一八六四年モーデナの士官学校に入学、一八六五年将校となり、一八六六年クストーザの戦闘に参加、一八七一年退役してイタリア軍の週刊新聞『軍国イタリア』を引き受け、一八九二年社会党に入党、一八九八年社会党の候補者として選挙に立候補、国会議員となる——を、事情も知らずに表面的にみるなら、この詩人は始末におえない粗野な熱血漢、疾風怒濤の人であり、その生涯は全く異なる、それどころか互いに対立する二つの思春期に分たれると考えてしまふであろう。しかしながら、そのような判断は歴史的精確さ

を主張することからははるかに遠いということになる。

デ・アミーチスは、たとえ王国の将校として軍服を身にまとい、軍人作家として軍人向け新聞の編集に加わっている時でも、常に人民の友、人民の子であり続けた。既に兵士時代から彼は、上官は命令を伝え、兵卒はそれに従うだけだと信じる小賢しい追従者などでは決してなかった。彼は軍隊内のこの二つの社会的グループ間の接近、精神的融合について発言していたのである。デ・アミーチスの文学的創作も又全生涯を通して一つの全体であり、矛盾も対立もない首尾一貫したものであった。軍属としての著作の中でデ・アミーチスは、そもそも血を流すことに反対し、平和を愛好する者としていつも力強く宣言していたのだが、労働者に反対するような文章は決して書かなかつた。それと同様に、後に社会主義者となった時も権力者に反抗するような文章は決して書かなかつた。他の何よりも彼の芸術方法からしてそうはさせなかつたのである。デ・アミーチスの芸術は全く「時代遅れ」だったのである。獨創性の追求も、些末なモチーフを專制的に無視することもない。むしろ平凡な庶民の細やかな心の動きの叙述、日常的な事件や情景の愛情ある分析に打ち込んでいる。その打ち込み方はなるほど繊細なものだが、情趣のうえで上

品というわけではない。その主人公は高貴の人ではなく、平均的な人間、庶民である。この意味で彼の初期の物語『兵卒』は『クオーレ』中の少年少女に似ているし、この子供達も『路面電車』というスケッチに出てくる社会主義者の貧しい医者によく似ている。彼らは皆階級の人間であるよりも前に端的に人間なのである。職業上の粉飾をすべて払拭した人間の心、これこそデ・アミーチスが自分の探求の分野として選びとったものである。

かくしてエドモンド・デ・アミーチスの創作には、彼の政治的、社会的変転にもかかわらず、全き統一性が存在するのである。といって多面性に欠けていたという意味ではない。彼にはままならなかった大河小説を別にすれば、デ・アミーチスは著作のあらゆるジャンルを試みている。最も有名なのは小説である。就中、教育的色合いをもった小説、学校生活の叙述——何よりもまず三六カ国語に翻訳され、八二版を重ねた本『クオーレ』——はほとんど世界的な名声を獲得することになった。それらによってデ・アミーチスはあらゆる国あらゆる言語の子供達の心を占領してしまった。旅行記作家としても彼は揺ぎない地歩を占める著作をものした。描写の新鮮さ、対象への親愛、その愛を表現する熱情、繊細な情景

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(4) 氏家

描写(特にスペイン、オランダ、コンスタンチノーブル)の点でそれらは無類のものである。最後にデ・アミーチスは言語学者としても相当の名声を確立した。この言語学者としての資格で彼は、社会主義を標榜した後でさえ、時の寛容の政府によって文化省の学術顧問に任命されたのである。もう二、三挙げておかねばならない。つまり、優れた歴史書、ワインに関するユーモアのある心理学的研究書、数巻本の文学的、愛国的回想録、そして数多くの優れた講演である。講演については、この詩人がトリノ大学の学生に、社会問題について熟慮し、自らの解放のために闘っている労働者に連帯するよう説いたものが重要である。⁽¹⁾

(1) この講演はドイツ語にも翻訳され『学生と社会』(ベルリン、一八九五年)という標題で出版された。

ところでデ・アミーチスの他の一群の労作についても想い出しておく必要がある。即ち、彼が詩人としての自己を忘れ、ほとんど社会学的類型論にまで突き進んでいる労作のことである。

先生物語(『ある先生の物語』)と一連の小説(『学校と家庭とのあいだ』)に於いて、学校生活は一人の模範的で熟達した観察者、叙述家を見出したのである。『軍隊短編集』の

(三四五) 七五

兵隊生活についても同様である。これらは深い情感にあふれ、感動的な調子で書かれている。社会学者と国民経済学者にあって重要なのは、小説形式でものされたとはいえ、遠洋航海汽船上でなされた移民に関する研究である(『洋上にて』)。これは、理由や目標や心情を異にする移民の類型の卓越した記述となっている。同様に『みんなの車』と題された長編小説に於ける、成長する大都市トリノの生活についての刺激的な研究があるが、これは路面電車(車はこういう意味である)の社会学と銘名したいほどである。

エドモンド・デ・アミーチスは、かつて祖国の民族解放闘争に命を捧げたものの、それが達せられた後、民族問題の解決は社会問題の解決をもたらさなかったどころか、初めてその全重量において現出せしめたという事に気づかねばならなかった知識人、質的にも量的にも有意味な一群のイタリア知識の一人である。⁽¹⁾ つのりくる幻滅はすぐにこの有名人の心をとらえ、それと同時にプロレタリアの悲惨への同情がわきおこった。こうして彼は社会主義者となったのである。彼は闘士ではなかったが——そのために必要な資質が彼には欠けていた——、真の社会主義者、不屈の使徒、イタリアで幾分畏敬を込めて福音の宣伝と呼ばれている、倫理的カテゴリー

に基づいたアジテーションに専念する使徒であった。即ち、宗教的な社会主義者、社会主義への深い信仰をもった社会主義者であった。同時に熱心な平党员でもあり、彼の詩人としての名声も、小さくて窮屈な煙の充満する居酒屋で開かれた一見どうでもよいような集會に参加する妨げにはならなかった。デ・アミーチス自身、そのような集會に受けた第一印象を書きとめている。それは一八九二年、彼が初めて詩人の白い手をプロレタリアの真黒なこぶしに握手の手を差し出した時だが、彼にとつてはまるで新しい聖なる約束を永久にかわしたかのようであった。それは、社会主義者たることがイタリアでは不名誉きわまり無い時代、いまだ道徳的なシミがこの若い運動に伴っていた時代、デ・アミーチス自身の言葉を使うなら、名うての社会主義者と一緒に街頭を歩く拳に出た真面目な人間が、まるで、札つきの犯罪者と腕を組んで歩く警官のように驚きあきれた目でみつめられた時代であった。従つて、兵隊詩人であり愛国者であった者が社会主義者に転向したというニュースは初め、一般には信じられないこととして受けとめられたのだが、それも当然なのである。初めのうちはデ・アミーチスはブルジョア陣営内によくある単なる博愛家であると考えられていた。しかしデ・アミーチス自身

は、自分の社会主義が社会主義労働者党のそれと同じものであると公けに宣言することによってブルジョアジーからこの幻想を奪ってしまった。当時のイタリアの支配階級は茫然自失の状態におちいってしまった。そのようなことをドイツ人が理解しようとするなら、審美的国民の世論に於いて、名にしおう偉大な愛すべき作家に与えられている意義に思いをいたすべきであろう。デ・アミーチス宣言の翌日、詩人が居所と選んだこの旧首都の当局者は当惑してなすすもない有様だった。知事は無蓋車を止めてデ・アミーチスの友人に尋ねたものである、一体あれは本当のことか、自分にはまだ信じられない、と。誰が信じられよう。今まであんなに善人だった者が。これからどうしたらよいだろう。こういう無力感が支配する中で一人の保守的な市会議員は、デ・アミーチスは全くの危険人物であり、殺人鬼ラバチョルの親しい友人として有名で、たった今捕縛されたところだ、という作り話を信ずるに及んだほどである。

- (1) ロンブローゾの場合と似ている。(本書七三頁を見よ)。「R・ミヘルスの同時代人論(3)―チェーザレ・ロンブローゾ」『神戸学 院法学』第一五卷一号、一二七頁をみよ。訳者)
- (2) デ・アミーチス『みんなの車』La Carrozza di tutti

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(4) 氏家

(Milano 1896), pag. 150. をみよ。

社会主義にたどり着いたデ・アミーチスは、その情動的側面を他の誰よりも深く把握していた理論に経済学的にも精通するべく努力を措きまなかつた。デ・アミーチスは、社会主義へ転向した他の数多くの文士のように、うわついたひとりよがりの熱狂や詩人の特権によって社会主義を扱ったりはしなかつた。そうではなく、道義的にもこの上なく真面目に、まるで熟達者のようにこの新しい分野に踏み込んで行ったのである。当時デ・アミーチスは、イタリア・マルクス主義の大家であり、革命的な若い労働者グループの政治的指導者でもあるフィリップ・トゥラーティの住むミラノへ旅することがあった。デ・アミーチスはトゥラーティの子供時代を知っていた。このクローネオ地方長官の四才になる息子はデ・アミーチス家の庭を暴れまわっていたからである。今や年上のデ・アミーチスが、もしまえの謙虚さから、社会主義の教授を受けるべくこの若者のもとへおもむいたのである。後年デ・アミーチスは、社会主義の反対者として、それを論駁する著作をものし、反批判に対する論戦を試みることもなるのだが。

それにもかかわらずデ・アミーチスは、上述したように、

敵密な意味での党本来の政策からは遠くにとどまっていた。

一八九八年イタリアを反動の嵐が荒れくるい、ヴェテランの社会主義者達が投獄や国外追放のために心身を消耗しているとき、デ・アミーチスは迫害された人々への一層の連帯を表明すべく議員に立候補することにした。しかしながら実際に当選すると、彼は自分が、公約を実現するにはあまりに實際的政治家ではなさすぎると感じた。その頃、家庭の不幸が次々と彼を襲っていた。最愛の長男の理由不明な自殺、社会主義に反対している妻との不和の始まり、である。妻との不和は、後にみにくい付随現象も加わり、離婚の終幕を迎えることになる。倦むことのない仕事への熱意にだけ支えられて、デ・アミーチスは悲痛な晩年を送った。おまけに、この詩人は政治の世界から益々遠去かっていた。党は彼にとって余りに大きなものとなってしまった。彼が何よりも党に求めたもの、彼にとつて党の最も本質的な重心であったもの、即ち感情の一致、そして党の魂である深い兄弟愛は時と共に、とりかえしのつかないほどに、激しい戦術的論争へと席を譲り、その結果、互いに責任をなすりつけ合い、憎しみ合う有様であった。曾てデ・アミーチスが非常に美しく描いたかの集会は消え失せてしまった。社会主義者になりたてのブルジョア

青年達や若い研究者達が社会主義の大義のすばらしさと正義とに対する最後の疑いを払拭し、いわば新しい魂の機制、今まで知らなかった魂の平安を手に入れてきたかの集会は消え失せてしまった。若人達にはその年齢に似合わぬ真面目な思想を芽生えさせ、年配者の気持と精神を生々と若がえらせたかの集会は消え失せてしまった。そして、あたかも言葉ではなく実際にすばらしいものを生み出し、世界のために有益なことを行ない、未来のために真実と善良と正義との聖なる種子をまいたかのような深い満足感を参加者全員の中に残した、かの会議の数々も消え失せてしまった。それにかわってたち現われたのは、内閣に対する党の態度とか、その種の日常的問題をめぐる喧々囂々たる議論であり、そこで同志達は事ある毎に互いに罵倒し合うようになったのである。このような変化した状況に、この倫理家の政治的伎倆と社会主義者としての神経はついていけなかった。といて、彼が労働者階級と社会主義への信頼、もしくは社会党への信頼までも喪失したというのではない。ただ現在に対する感性、うまいしい感受性と追求心はなくなしてしまった。後年デ・アミーチスが社会主義について発言することがあっても、それは内心深く憂える人の言葉であり、美しい過去はもはやよみがえ

らせることができないという痛恨を伴っていた。舞台装置の転換のために、近代社会主義の諸問題を大河小説の形で描くという大計画も頓座してしまつた。それは『メーデー』という標題になる予定であつた。晩年を通じてデ・アミーチスが党の雑誌や文芸誌に発表したその部分的断片は、この計画の壮大さをはつきりとうかがわせるものであり、詩人がこのテーマを構想した時の優しさ、情熱そして深い確信を告知していた。しかし結局この小説は断片にとどまり、デ・アミーチスは次の題材、即ち、多彩な回想記の執筆と先述したイタリア語の純化の研究にとりくみ始めた。一九〇七年秋筆者がこの詩人の家でくつろいだ談話をした折にもまだ彼は「どうしたらこの小説を完成できるようになるだろうか」と筆者に尋ねていた。筆者はこの機会を利用して、気懸りであつたこの問題の解決を試みた。「社会主義は全く変わってしまった。当時の運動の面影すら現在は残っておりません。私だったら、はじめから全て書きなおさねばならないでしょうし、そうしたとしても必ずしもうまくいくとは限らないでしょう。」すると、この豊かな、雪のように白い頭髮をもち、きびきびと軍人風の物腰をした偉大な理想主義者の口元に憂鬱そうな微笑がうかんだ。

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(4) 氏家

周知のようにデ・アミーチスは感傷的という非難を受けてきた。長髪の「超人」サークルでは、この「軟弱なエドモンド」は心ゆくまでからかつてよいのだ、と思われていた。依然として一八五〇年代の機知と文芸作法を示していた滑稽新聞は、この詩人を、いつも目から涙をあふれさせているように描いていた。このもつともな皮肉の真実とは何であらうか。デ・アミーチスはオプティミストであつた。いわば先験的なオプティミスト、資質と性格の上で、思索以前にオプティミストであつた。エドモンド・デ・アミーチス以上に鋭く人間の心を見抜いたものはそう多くはいないし、彼よりも思いやりのあるまなざしを注いだ者はほとんどいない。確かにデ・アミーチスも、人間の中には野獣が住まっていることに気づかないわけではなかつた。しかし彼は著作のうえではこの野獣を避けて通つた。思いがけずも悪意に出会つた時も、彼はそれを、好意的なユーモアと若干の憂鬱なユーモアをもつて、人間の本性に属している要素としてよりも、善意と自己教育、就中心暖かき人間の教訓的な模範によって矯正する悪しき習癖として扱つた。彼は、心と理性につき動かされて、人間本性のもう一つの側面、即ちその△善良な側面▽を好意的にじっくり考えぬいた。こうしてデ・アミーチスは

道德の詩人となつたのである。デ・アミーチスが目ざしたのは、気高く度量の大きな人物像や繊細で利他的な魂の動きを描くことによつて、読者を道德的に良い方向にみちびき、教育することであつた。というのも彼はいつも、題材の向うの読者に思いをはせていたからである。彼のねらいは、イタリア人が△おもしろい▽と呼ぶところを描くことで、この△おもしろい▽を感受性そのものの中に喚起することにあつた。

デ・アミーチスは倫理家であつた。倫理家といつても杓子定規ではない。また、おしつけがましく病的な道学者でもない。はたまた、文章の一つ一つから自らの教育的意図を洞見させようとして、美的センスのある人々の神経をさかなでするよゝうな厳格な教師でもない。そうではなく、繊細で心の豊かな、寛大で真に人間的な教育者であり、この地味な教育活動を色恋やその他の異質な要素の野卑な表現によつて中断したり、読者を大笑いさせたりすることを決して肯んじない教育者であつた。彼は、あるイタリア人批評家が語つたように、涙と微笑の先生であつた。

それにしても、デ・アミーチスが、とりわけ初期の創作に於いて、一度ならずオプティミズムを野放しにしたということとは否定すべくもない。なるほどイタリア軍に於ける従卒と

將校、一般的には上官と部下との關係は、その国民性や、イタリア半島ではさほど顕著ではなかつた階級分裂に対応して、他の多くの国ほど苛酷なものではなかつたし、むしろ親密さと誠意のあるものであつた。それは認めるとしても、デ・アミーチスの描いた、例の自己犠牲を払つてまで自分の従卒のことを思う若い將校というのは、イタリア軍の中でも稀有のことだったのである。そのうえ、一八七二年頃の小説では常に善が惡に勝利し、善は酬われ、惡は罰せられ、改悛させられるのだが、これも眞実に反したのみならず、それ自体で教育効果を阻害していたのである。そのため時には社会主義者の陣営からも、もちろんこの詩人に対する一般の尊敬を考慮して控へ目にはあるが、苦情が聞かれ始めた。所詮デ・アミーチスの見方はブルジョアの見方である。社会問題の深刻さ、情容赦無き階級闘争の苛酷さと必要性とが彼には全くわからないのだ、彼は社会的平和の支持者、あらゆる闘争の公然たる反対者、清浄な水の流の如き平和主義者なのだ、と。ところでデ・アミーチスは社会主義をまさしく文化運動と捉えていた。その際彼が、人を納得させたり説得する技術については、心情と理性に訴へること——なるほど重要で有効ではあるが、これのみでは決定的とはいへない——をあまりに

重視し過ぎたということ、彼の社会主義的スケッチ並びに物語りの主人公は例外なく無私で理想主義的な知識人、学究の徒であるということ、この点については当っている。しかしこれは他ならぬイタリヤ社会主義の環境にある程度は相応していたのである。⁽¹⁾トゥラーティヤやプラムボリーニのような人間との個人的友情、それに事物の発展の進化的な捉え方の故に、彼は党内抗争——彼は危機をこれ以上先鋭化させないために、この問題で公けに発言することはなく、親しい友人グループ内でのみ語るようになったのだが——では修正派の側に立つことになった。特に彼は、社会党の諸派内でも流行していた、空虚で挑発的な、しかし行動を伴わず、全くお飾りでしかない革命的言辞⁽²⁾に反対していたが、これは正当なことである。しかし彼の内部で発展していた望ましき生活像は、決して、政治生活の現実と歴史的対立の必然性に対する彼の目をくもらせはしなかった。彼は⁽³⁾涙もろいセンチメンタリスト⁽⁴⁾としての資質の故に男らしく怒ることなど出来ないのだという、彼の反対者が国際的社会主義「社会主義インターナショナル」の内部に広めた風評は断然正しくない。ここで反証として、この白髪の人詩人が、ヘテルブルクの一二月の虐殺（一九〇五年）の直後、ロシア革命のためにトリノ

の社会主義者協会に送付した言葉、断じて平和の使徒らしくらぬ力強い言葉を想起してほしい。

「心の底から私は皆さんの意見に同意します。私は人間の権利の名において闘うロシア人民とヨーロッパ文化を有しない暴政に驚くばかりです。ロシア人民に撻撻を送ります。私は皆様とともに、裏切りと卑法によって一層恐るべきものとなった極悪非道な虐殺の哀れな犠牲者に心より哀悼の意を表します。私の希望は、非武装の大衆が昨日は得られなかった勝利が明日には武装した大衆のものとなり、ヨーロッパが、恥ずべき野蛮な独裁、迷信と無知に基づいた独裁、一億の人間をコサック兵の擗猛な槍によって治めることが出来ると信じている独裁から解放されることなのです。」⁽⁵⁾

(1) Vgl. Robert Michels: "Sozialismus und Fascismus als politische Strömungen in Italien. Historische Studien. Band I: Sozialismus in Italien. Intellektuelle Strömungen." München 1925. Meyer u. Jessen, s. 234ff.

(2) ここで筆者の念頭にあるのは、全く無理解なマウリツィオの記事「デ・マウリツィオの社会主義」*Maurizio: De Amicis und sein Sozialismus, in der Neuen Zeit*. 1891-1892, 2. Band, s. 626ff. 及び「ソルトウーロ」ヨプリオーラの著作『社会改良と社会革命』*Labriola (Arturo): "Riforme e Rinoluzioni*

Sociale." (Milano 1904) それと同じ著者の論文『デ・アミーチ

ストイタリヤ社会主義』"De Amicis e il Socialismo Italiano,"

in *Pungolo*, 1908. 2665.

(c) Avanti!, Nr. 2929.

確かにデ・アミーチスはかつて権力闘争の問題についてト
ルストイ流の原則を表明したことがある。彼は、自分の議会
への選出を断る文書の中で、あらゆる暴力を「たとえそれが
大義の名のもとに行使されたとしても、狂気であり犯罪であ
る」と断じた。しかし歴史は彼に別のことを教えた。警察隊
と軍隊がメーデーに行なわれた労働者の平穏なデモをどれほ
ど野蛮にけちらしたことから、彼自らトリノーの居宅の窓ごし
に目撃せざるを得なかったからである。こうして彼の胸に、
善はやはり全能ではないという確信が迫ってきたのである。
「ブルジョアジーに労働者の大義は決してわからないであろ
う。たとえ借金で首が回らなくなっても、何もわからないで
あろう。そして何もわからずに結局は酒に溺れてしまいうであ
らう。」

(一) Avanti!, Nr. 2665.

(c) *De Amicis*: "Lotte Civili", l.c., p. 270.

我々は、このイタリアの巨匠の本質をドイツの読者に洞察
してもらうには、彼の創作の見本のいくつかを出来るだけ忠

実に翻訳してみるに若くはないと考える。

「考えさせる四つの話」⁽¹⁾

(1) 詩人の許可を得て翻訳した。これらの話は『みんなの車』か
らとられたものである。

〔第一話〕

『おれんが工』

「さあ、そろそろ行っておくれ」とマリーオは妻に言った。
「もうすぐれんが工のペローニがやってくることになってい
る。彼と話があるんだ。」

「きつと社会問題の話ね」若い妻はわざと気まじめに答えて
言った。彼女は自分の明るい声がよくとおるよう努力して
いた。「あー、この社会問題を早く解決してほしいものね。」
「笑うがいいさ」夫は言った。「その話は前にもしたから
ね。君は雀のような愛くるしい声をしているけれど、おつむ
も雀くらいなんだから。だから君が笑っても私は大目に見て
いるのさ。さあさあ、お願いだから出て行っておくれ、一人
にしておくれ。」

「ねー、私もここにいちゃいけない。」

「だめだよ、私の天使さん。君にはどうせわかりはしないよ。でも、何もあやしげなことではないから、ドアのところのカーテンの後にいるならいいよ、ただ姿をみられちゃいけないよ。」

「あなたがたの会話を記録にとつてもいいかしら」若い妻は問いかえした。彼女の口元にはちよつと小馬鹿にしたような微笑がうかんだ。

その時女中が入つて来て、れんが工が来ていることを告げた。若い妻は、まるでびっくりした小供のように滑稽にあわててみせてカーテンの後に姿を隠した。

労働者が部屋に入つて来た。彼の足どりは大地を引きずるように重かった。全身びしょぬれで、よごれてもいた。外は雨だった。マリーオは机の傍のイスをすすめ、向かい合つた。客はゆっくり部屋の中をみわたし、それから机の上にあるものを一つ一つ注意深く観察し始めた。それらを正確に知っておきたいかのように。二人は同じ建物の中に住んでいるのだが、マリーオはほぼ一年このかたこの老れんが工の姿をみていなかった。彼はその間にすっかり老けこみ、以前にも増して寡黙に、陰気になったようである。マリーオは子供のことやその他いろいろなことを尋ねた。答えは短かく、とつとつ

した言葉で、しかも間のびした声で返ってきた。それはまるで喋りながら何かを口の中で咀嚼し、それがのみこめないでいるかようだった。そして唐突に、自分の考えを正確に表現できない時のように彼は話を止めてしまった。丁度、緊張しても結果はたいしたことではないのだから緊張するのは止そうと決心した人のように。そして彼は、マリーオが手なぐさみに書きものをするペンを魅せられたようにみつめていた。ようやく彼は大声ではっきりと言った。「私は解雇されたのです。一二年勤めた後にですよ。もしかしたら復職出来るかも知れません。でも私は蜘蛛のようにおしつぶされてしまふにちがいません。」それから唐突に彼はつけ加えた。「もうたくさんだ。しよせん無意味なことなんだから。それに……、やはりどつちでも同じですよ。時間はあるから、出来るなら……。」

年おいたれんが工はしばらくの間黙って立ちすくんでいた。そして突然、まるで頭と心臓の中の爆薬に点火されたかのように、彼は饒舌になった。今度は乱暴な語り口で心のたけをうちあげ始めた。乱暴な語りくちといつても、そこには、自分の恩念を何度も考え抜き、整理した時には教養の無い人にも可能な規則と秩序というものがあつたのだが……

自分の貧弱な部屋は中庭を囲むこの賃貸アパートの側面にあるのだが、そのドアから上の方をながめると、この家の窓の絹のカーテンを通して、壁には立派な壁紙のはってあるのが見えた。そこには金色の類縁の絵画がきらきら光っていた。すばらしい家具類がそれらと見事な対照をなしていた。バルコニーには高価な毛皮と敷き物が広げられ、窓には雛鳥と七面鳥がぶら下がっているのが見えた。注意してみると、榮養のゆきとどいた、身だしなみのととのつた、威厳のある召使、葉巻きをくわえた品のある当家の主人、美しい花に囲まれて読書をしている優雅な婦人、高価な玩具で遊んでいる子供達もみえた。ビンの栓を抜く音が聞こえた。食卓を囲む客たちの高らかな笑い声がピアノの音のように耳に入ってきた。台所ではグラスや陶器類がガチャガチャしていた。おいしそうなにおいが鼻をくすぐった。この建物には家主の他に弁護士、興業主、退役陸軍大佐、数人の官吏と利子生活者、それに医者と画家が住んでいる。暮し向きは自分より良く、誰一人として自分のようにあくせく働いてはいないし、今まで働いたこともない。一番貧しいのは他ならぬ自分である。五年間兵役を務めた後五〇年間働きどろしどろした。何度も危い目に会ってきた。健康状態は悪化するばかりである。年齢よりも早

く老けてしまった。ダンナ方の中でも最も誠実な人と同じ位誠実に生活のために闘ってきた。しかももっと苦しい状況の中で。仕事もしてきた。これについては、ダンナ方の仕事に劣らず世の中の役に立っていると、自分の良心と分別にかけて言うことが出来る。それなのに何故自分は、数も少ないダンナ方より社会の下積みになっているのか。何故自分だけが、きゅうきゅうとしながらやっとな家計を支えるために、一日一〇時間も働かねばならないのか。どうして自分は無教養で、食べるものも着るものも粗悪で、皆から尊敬もされないのか。貧困に対する自分の思いは、日々の生活における辛く苦しい比較によって、いつもくりかえし自覚させられてきた。自分には不正が行なわれているという感じはつのである。数えきれない音、香り、振る舞い、まなざし、そして言葉によって強められる。自分には、別の思いへと導いてくれるもの、例えば過ぎ去った人生の美しい思い出とか、心地よい読書とか、愉快な友達とかも無い。他の労働者のように、たとえ自分と同じように貧しくとも、少なくとも人生に力強く立ち向かい、本や新聞によって、本人と子供達の暮し向きは遅かれ早かれ良くなるだろうという希望に心の支えを見出すということさえない。自分には何も無く、何の値うちもない。最低

の生活者、人間だけれどもこの家のくずのようなもの、半分は動物、二本足で立つ経済の道具でしかない。夜明けと共に仕事に出かけ、夜になると泥だらけになって、意識も朦朧とし、疲れきった仲間と一緒に家に帰り、わずかばかりのスベゲッティを食べる。自分の生活はこのようにわずかの變化も、慰さめも、人生の喜びもなく過ぎて行き、そして一日が終わる。

たとえ表現はちがっても、これが老いた労働者が医者に物語ったことである。彼が語り終えた時、深い静寂がその場を支配した。マリーオは物思いにふけていた。労働者はこの静寂を暇乞いの潮時と感じた。彼は立ち上った。

「もうおいとましなければ、彼ははつきりと言った。そこには悲しむべき忍従が現われていたために、若い知識人はそれまで聞かされたことのすべてと同じ位心が痛む思いをした。だから彼はすぐに、いったい何をしてあげられるかと聞きかえたのである。

それは心からの問いであった。レンガ工は感謝と自尊心の混った表情で彼をみつめた。その表情はあたかもこう言わんとしているかのようだった。

「もちろん。でもあなたは私のために一全体何がお出来

になるでしょう。私に仕事をくれますか。せいぜいほどこしが出来ただけではないのですか。」しかしこれは口には出さなかつた。ただこう言っただけである。

「感謝いたします。」

若い知識人の質問と年老いた労働者の答えの中には善行という巨大な問題の全体がこめられていた。

レンガ工は帰ろうとしていた。ところが、彼は立ち去る前にもう一度、四囲の壁を埋め尽した膨大な量の書物に目をくれてやった。彼と二歩のところにあったマリーオは、一瞬、そのレンガ工の胡麻塩頭の横顔が、部屋奥にある木枠でガラス扉のついた書棚をかざっている、あるイタリア人の詩人兼歴史家の白や金色の美しい大版の書物を背景に浮き上っていることに気づいた。彼の狭い額は思想の乏しさを示し、下唇は無量の気苦労のために下方に引っぱられているようであった。このかわいそうな男はかの思想の世界の存在を思いつくことさえないのだ、彼は、若い知識人である自分がそれらから享受してきたあの無限の喜びや知識の一切から永久にとざされているのだ、とマリーオは考えざるを得なかつた。彼の心に、この盲人、その目が世界の美をとらえることのできな

いこの盲人に対する同情が湧きおこってきた。

「しかし随分たくさんのお持ちですね」とレンガ工は最後に言った。

この素朴な言葉はマリオの思念を別の方向へさし向けた。まったく、どれほど多くの空虚、虚言、誤謬、不正、そして卑劣がこれらの本の中につめこまれていることか、それをあなたが知ってくれたら、と彼はどんなに答えてやりたかったことか。しかし答えてやったとしても、この老れんが工に彼の言うことなど理解できなかったであろう。だから彼は、もう一度おいで下さい、と言えるだけだった。そして、夜に娘さんに読んでもらうようにと、近々『レンガ工』と題されたパンフレットを何部か届けることを約束した。こうして、自分の属する階級の利害にいくらかでもかかわりをもつようにと、彼を激励してやったのである。

「たとえあなた自身が何の改善も体験できないとしても」とマリオは最後に言った、「あなたの子供や孫達はきっと経験するでしょう。そのことは太陽の光のようにはっきりしています。だからあなたは彼らに希望をもたせ、自分の態度で彼らを落胆させたりしてはなりません。外国ではもう良くなり始めているのです。どうして我々だけが改善へ向かわないことがありえましょう。」

レンガ工は目を見開いた。口元を軽く憐憫のようなものがすめた。それどころか、この知識人の言葉の示す無知に驚き、嘲笑している風でさえあった。それから彼は頭を振りながら、医者差し出した手を握って、独り言のように口をもぐもぐさせて言った。

「あなたは本当に良い人です。でも援助はたいして役にはたちません。……もちろん何もありませんが、」短い間をおいて彼はつけ足した。そして彼は出て行った。来た時と同じように背をこごめ、服には石炭水のはねをつけ、そして、雨に濡れながら。

マリオはドアまで見送った。書齋にもどると、机に肘をつき掌にあごをのせて座っていた。

「じゃ、ずっと聞いていたんだね」彼は尋ねた。「君はとっても真剣な顔をしている。僕が君から得られないものが何か、あのレンガ工の話から君にもわかっただろう。そうじゃないかい」。それから彼は手を彼女の胸の上に置いて、優しい声で言った。「ほら、君にも心がある」彼は笑って尋ねた「もうこれからは社会問題を馬鹿にはしないでらうね。」

「決して、マリオ」若い妻は言った。彼女のまなざしは、一つの思いにとらわれてしまったように、遠くをじっとみつ

めていた。

※

〔第二話〕

『洗礼』

女中が入って来て、「××氏がお見えになっていません。お入れしましょうか」と告げた時、一〇才のアルベルト少年は父親の部屋で遊び回っていた。

「何ということだ」父親は叫ぶと、読み耽っていた本——それは、法学者カロフアールが「社会主義的迷信」と自ら信じていることについての有名な文献であった——を傍に押しつけて、イスから立ち上った。「五カ月も監獄にいたんだ。すぐお入れなさい。」

△五カ月間の監獄▽という言葉に少年はびっくりして玩具をとり落し、部屋の隈へと尻ごみしてしまった。そして当の本人の入ってくるドアの方を目をいっぱいに見開いてみつめていた。頭の中を当惑の影がよぎった。彼にとって△監獄▽という観念は犯罪と不可分であった。父親が友を出迎え、心から抱擁するのを見ながら、彼は驚愕にじっと耐えていた。友人というのは、青ざめてはいるが元気な顔、貧相だが小さくつばりとした服装の三五才ぐらいの男で、物腰は飾り気がな

くあけつびろげであった。

その外来者は、当家の主人と窓際に席を占めると元気に話を始めた。言葉のやりとりはとぎれることなく、そして際限なく続いた。少年は隅っこから注意力を集中してこの会話に聞き耳をたてていた。しかしとりわけ自分の父親の友人が、ついこの前裁判所から連行されるのを目撃した名うての殺人鬼のように、手に手錠をかけられ故郷の村の真中を監獄へと引きずられていく話に及んだ時には、それまでの恐怖感が嫌悪感に変わってしまった。それがあまりにはつきりと出たために、この外来者がふと少年に目を止めた時には、自分のためにこの少年がどういふ心理状態にあるか、すでに悟らざるを得なかった。実は父親の方が、彼よりも早く息子に気がついてはいたのだが。

いきなり父親は、部屋に置いてあったトランクから一包みの新聞を取り出すと友人に手渡しして言った。

「君に今言っておかねばならないことは全部この新聞に書いてある。君のために集めて保管しておいたんだ。それを読めば、君がいない間我々がいつも君のことを考えていたということがわかるよ。そこには私の気持と、他の△犯罪人▽全員の気持が書いてある。」

友人は新聞を受けとると、背を窓の方に向けて座り、熱心に読み始めた。父親は少年を長い間放っておいた。それからもう一度息子の方に向き直った。彼は質問を待った。息子が今にも尋ねたくてうずうずしていたのがわかっていたのである。実際息子はすぐに父親に小声で尋ねた。

「お父さん、この人はいったい何を……やったの。」

父親は笑った。「何をやった、だって。五カ月の監獄行きをくらったのさ。」

少年はしばらく混乱していた。しかし自分をとりもどすと、おそるおそる尋ねた。

「この人はいったい誰なの。」

父親は座って、息子を膝の上に抱きあげた。

「さあ」と彼は言った。「その質問は簡単に答えられるよ。

でもやっぱりお前はお父さんの話がわからないのじゃないのかな。よくお聞き。お前は知らなきゃならない。どの国にも、世界を苦しめているものすごい貧困やとんでもない不正の大部分はとり除くことが出来ると考えている人が大勢いるんだよ。その中には、たくさんの学者や天才、それにお金持だって入っているんだ。この人たちは、その治療のためには、人々が互いに争うことしか知らない今の社会を、みんなが働い

ている偉大な社会へと変えねばならないと信じている。その新しい社会では、自分の利益のためにだけ働くということはなくなくなるだろう。人間が人間に、もっと言えば、大多数の人々がほんのわずかばかりの人々に経済的に服従するのではなく、社会それ自身が全員に何でも等しく分け与えるようになるにちがいない。そうなれば、もう今の社会のように、死ぬほど苦勞しても貧乏なたくさんの人々や、そもそも仕事がなく飢え死にしようもったたくさんの人々と並んで、ちょっと働かないのに幸福に暮らしている何千人かの人がいるというような社会ではなくなるにちがいない。ここまではわかったかい。いい子だ。さて、全員が一致して自分たち全体の幸福のために協力し、しかも他人のパンを横取りすることがない、文化生活にも全員が平等に参加する、ちょうど、同じ家族の息子達がみんな平等に愛され、守ってもらえるようにね、そういう時代がいつか来ることを望んでいる人達はみんな自分達のことを社会主義者と呼んでいる。ところでこの人達は何をするだろう。彼らは次のようなことを他の人達に証明するために全力をつくしているんだ。まず、そのような社会を変えることが出来るんだということ、それだけではなく、それが本当の自然の発展の力によってほしいに実現して

くるということ、これを証明しようとしている。でも、その発展を早めるために、それから、どんな暴力も使わないためには、みんながそれを手助けし、準備しなければならぬ。こういうことを証明するために、彼らは大衆のみんなに、その義務と権利をはっきりと描いてみせているんだ。ほかにこの人たちは何をしているんだらう。彼らは自分の階級の仲間にごう説いて聞かせている。諸君の目標を実現出来るのは、諸君が、自分達の利益と意思の擁護を、この目標に個人的な関心をもっている人達、つまり、貧乏や不正に苦しむあのたくさんの家族の一員である人達にまかせた時なんだ、とね。

父さんの話はわかりやすかったかな。さあ、坊や、今父さんの傍にいるこの人はそういう社会主義者なんだ。彼は労働者だから毎日のパンを食べるために働いている。しかし、余分にあるちよっぴりの自由時間を使って、あちこち歩きまわり、自分の仲間達の目を開かせ、教え聞かせ、自分の信念を彼らに伝えていく。相手が誰であれ、憎しみをおこさせるようなことはしない。正反対なんだ。もし彼が仲間の心の中に個人的憎しみの感情をみつけると、彼はそれをなだめようとする。激しい感情を和らげるようにさすのだ。無知な者には教養をつけるように勧める。もめ事の仲介も買って出る。

貧しく困っている人にはより良い未来をさし示してやる。それは、真理と正義の力によって、平和的で合法的なやり方で、真理が全員に承認され、正義が全員に欲せられた時に初めてやってくるにちがいない未来のことなんだ。よく考えてごらん、坊や、こういう努力や心配の全部をこの人が自分で引き受けるのも、全体の幸せに役立ちたいがためなんだ。しかも、自分ではこの望まれた目標を経験することは決してないということをよく知っている。彼の暮らしは貧しい。彼自身が貧しいからね。しかし、彼が無しですませられるもので我々の生活には絶対不可欠と思われるものはどんなものでも、それだけで彼には余分なもので、ただひとに与えられるだけなんだ。もし彼が金持だとしたら、彼は自分の全財産をひとあげてしまっただらう。もし命が必要となったら、彼は自分の命をもなげうつだらう。何故と云って、彼にとって自分の命にかかわるものは何もないし、彼は自分の理想だけで生きていくからなんだ。彼の過去には一点の曇りも無い。彼の心は善良で悪意がない。それはまるで子供みたいだ。父さんが人生でたくさんの人々と知り合いになってきたことはお前も知っているだらう。だから、父さんがお前に、この人は父さんが今までに出会った中で一番誠実で、私欲の無い、立派な人だ

と言っても、それがどういう意味なのかお前にもわかるだろう。だから父さんは彼を愛しているし尊敬もしているんだ。」少年はじつと物思いにふけていた。彼は父親からこの△前科者▽に目を移し、それからもう一度父親の方を見た。ようやく少年の口が開いた。

「そう、でも、……それならどうしてこの人は監獄なんかに入れられたの。」

「それは、今お前に語って聞かせたように彼も考え、ひとに話して聞かせたからさ。」

「そう、それじゃ、もしお父さんが彼とそっくり同じことを考えているとしたら、お父さんも監獄に入れられちゃうの。」

「きつとね。」

「それじゃ、どうして彼だけがぶちこまれてしまったの。」

「それは、彼が、二人共通の考えを、父さんより力強く、大勢の人に主張し、それに、彼の方が利己的ではないし、誠実だし、人間を心から愛しているし、勇気があって気高いからさ。」

この言葉に少年はふいに黙りこんでしまった。目を大きく見開いてこの外来者をみつめていた。外来者の方は少年のこ

となどに気がつかず、まだ新聞に読み耽っていた。

その時父親がもう一度息子の方に歩みよった。

「ちょっとお聞き、お前は本当にいい子だ」耳もとで彼は言った、「お前にもわかっていると思うが、あの人が部屋に入ってきた時、まるで追剥がなんかのようにお前が彼をこわがったということに、彼はとっくに気づいているんだよ。お前はあの人によくしなければならぬ。彼のところへ行ってちゃんと挨拶しておいで。」少年はゆっくりと、躊躇しているかのように、前科者の方へ近づき、男の膝の前に進んで行った。少年は何も言わなかった。そのかわり、抱きしめてほしいかのように、男の方にプロンドの頭を差し出した。そこで外来者は新聞を置いて、初めは父親、それから息子の方を見て、すべてを了解した。口元に微笑がうかんだ。その恐れを知らない心、あらゆる迫害の中でも、手錠という侮辱を加えられた時でも、一瞬として弱気になったことのないその心が感動にふるえた。少年の無意識の信服は、男の心にはすばらしい未来像を表わしているようにみえた。この瞬間に、新しい世代が気高い熱意に促されて、彼が人生を賭してきた理想に忠誠を誓っているように思われた。一瞬、彼はこの若い友人の顔を喜びに輝く目でみつめ、それから少年のプロンド

巻毛の頭を両手で抱きしめ、何度も何度も接吻してやった。少年は父親のところへもどつてくると、びっくりしながら、接吻のためべとべとになった額を示した。

「そのまましておきなさい」父親は言った「そのままにしておきなさい。それがお前の洗礼の聖水なんだから。」

※

〔第三話〕

『行方不明になった息子』

『フォルクスシュティム』 Volksstimme の娯楽欄、一九卷、一四号、一九〇八年四月四日。

二人の男の対話。二人はゆうに五〇才を越えている。一人は市参事会員、もう一人に肩書きはない。二人は何年かの後久し振りに再会したのである。彼らは今、市参事会員の家で小さなテーブルを間にくつろいで座っている。テーブルの上には首の長い二つのグラスと一びんのマデラ酒がのっている。肩書きのない男が一口飲んで言った「こうして君と再会できて、本当に言葉で言えないほどうれいよ。元気でなによりだ。ところで、君の息子さんはどうしているかね。最後に会った時はまだ子供だったが。何をしている。君のことだから、彼とうまくやっていると思うが……。」

市参事会員は急に額にしわを寄せて言った「お願いだ、彼のことなんか話さんでくれ。」

肩書きのない男、びっくりして「それはどういう意味だ。」市参事会員「どういう意味だって。彼のことは話したくないという意味だよ、君。僕がこの一人息子をどんなに愛していたか、君も知っている通りだ。いい教育を与え、躰もちゃんと、洋々たる道を歩かせるために僕があらゆることをしてきたということね。それなのに、考えてもみてくれ（深いため息をついて）、あいつめ、社会主義者になんぞなりおった。」

肩書きのない男は椅子から跳び上った。表面はいくら真面目にしようとしても、その顔から微笑は隠しようもない。「君は何を言っているんだ。いい息子さんじゃないか。社会民主党員なのかい。君の言っているのは、きつと、最近の言い方というなら、博愛主義者か、それとも、これも今流に言えば、キリスト教社会主義者、つまり簡単に言つて精神的な人道主義者か、そのどちらかだろう。ねえ君、そんなことで大騒ぎするなんて。二〇才にもなれば誰でもそんな気まぐれをおこすものさ。」

市参事会員「ちがうんだ、君、そんな生やさしいことじゃ

ないんだ。君の言う通り、彼は本物の社会主義者、社会民主主義者で党员なんだ。定期的に入党手続きもする。アジ演説もするし、本当の扇動もする。あ、お願いだから彼のことと言わんでくれ。開いた傷口に触れんでくれ。僕にとって彼は行方不明の息子なんだ。」

肩書きのない男は考えこんで、そしてほへんで言った。「何ということだ。彼は本当に心の優しいいい子だったのに。誰が彼の心をそんなにだめにしたんだろう。」

市参事会員は、いぶかしげなまなざしを向けて言った「ねえ君、僕は彼が悪くなっちゃったとは言っていないよ。それどころか、心根は前とちつとも変わっていないよ。彼の心に責めるべきところはないんだから。」

肩書きのない男「何だって。彼は君をもう尊敬しなくなっちゃったんじゃないかい。彼は君に対してはとつとも変わってしまつたんじゃないかい。」

市参事会員「いや、ちつとも。それにもかかわらずなんだ。我々がどんなに争ってばかりいたか、今でも機会あるごとに毎日争っているということをちつと考えてみてくれたまえ。いやいや、そうじゃない。本当のことを全部白状するなら、我々が争い合っている。彼の方は無礼なこともなく、穏や

かに振る舞っているんだ。だから彼が僕をなだめることにどれだけ気をつかっているかよくわかるんだ。それどころか、彼の心は善良だ。心について言うなら、以前よりもっと優しくなっていると聞いたくらいだよ……。彼は誠心誠意自分の考えに僕を同調させようとする。そのためには相当の純朴さ、いやいや厚かましさが要るんだろうが。君にはわかるまいがね。」

肩書きのない男「しかし彼は自分の経歴をだいなしにしてしまった、そうじゃないかい。それこそ君が腹を立てていることなんだ。」

市参事会員「経歴だって。そんなことはもともと誰も言うはずがないよ。経歴ね。言わせてもらうが、それは君自身が言い出したことだ。君も知つての通り、僕の息子は、そりゃ金持になることはないだろうが、生活に困らないだけのものはいつももっているだろうからね。僕は彼に、法律学を学んで学位を取るよう頼んできた。それはちゃんとやったし、その点では安心している。白状しなければならぬが、僕は彼が弁護士として、疲れ切つた大勢の同僚に混じって、あちこち客を求めて走り回っているのを見ている。こんなことを考えると、いつも、ぞつとするし、うんざりしてきたんだ。だ

から僕は彼に言ってきた。弁護士にはならなくてよい。お前よりも弁護士になる必要のある人が他にまだいる。その人達に譲ってやりなさい。お前が勉強して学問を愛し、そして自分の人生に目標をみつければ、それだけで僕は十分満足している、とね。ところが僕がこんなにも憂鬱なのはまさにそのことなんだ。財産もおぼつかない家の息子が社会主義者になったとしても何も失うものはない。もしかしたら何か手に入れるかも知れないという理由で社会主義陣営に身を投じたとしたら、それは僕にもよくわかる。しかしだ、息子の場合は社会主義者になっても何の得にもならず、何か利益を引き出すつもりもない。その彼がこんなことに足をつっこんでしまった。およそ理解できることではない。僕はくりかえし自分に問うているんだ。いったいどうして、彼は地獄への道に踏み込んでしまったんだらう。いったいどうして、こんな汚点を身につけてしまったんだらう、とね。」

肩書きのない男「よくわかるよ。君の望みは、彼がせめて働いてくれることだ。ところが今の彼は不真面目な生活を送っているし、学問もしていない。彼にとって社会主義は何もしないための口実でしかない、というわけだ。」

市参事会員「いやいやそうじゃない。なんなことを言いた

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(4) 氏家

いのではない。学問さえしてくれたり、だって。とんでもない。彼の人生で現在ほど一生懸命勉強したことはないのだから。まるで机に釘づけになったみたいに、彼は、山と積まれた本やらパンフレットに首を埋めている。それでも十分じゃない。毎日新しいやつを買ってくる。たくさんの、解けそうもない難しい問題に頭を悩ませている。そりゃ有益で立派な問題であることは僕も認めるよ。でも、それは彼の年齢にはまだ難し過ぎるし、益々頭を混乱させかねない問題なんだ。

確かに、白状するけれども、彼と議論するとね、まあ、僕の方が不利になる場合も時々ある。でもそれは、僕の方に根拠がないというのでは断じてないからね。そうじゃなくて、彼みたいに学問的な権威にうったえることが出来ないというだけなんだ。わかるだらう。彼の方には知識と引用の豊かな蓄積がある。それは、まるでもう大学教授のようなだから。」

肩書きのない男「いやはや……。それじゃいったい君はどうして腹を立てているんだい。……はほん、やっとわかったぞ。彼は君のお金を使い過ぎるんじゃないかい。」

市参事会員「使い過ぎるだって。それはちがう。もっとも結構使っているがね。」

肩書きのない男「やっぱり。△聖なる大義▽のためのお金

か。それを彼は、他のいろいろな口実で君からかすめとる、とこういうわけだ。」

市参事会員「とんでもない。どれほど平然と彼が自分の心にかかっていることのために金を使っているか、君にも知ってもらいたいよ。言訳なんかしないんだ。考えてもみてくれ。彼は、厚かましくも、単刀直入にこう言うんだ。お父さん、選挙のためにこれこれのお金が必要なんです。他にも、ストライキをしている人のためとか、労働者新聞のためとか、その他わけのわからないことのために、とかね。しかも、あまりに決然として言うものだから、僕としても断りきれないんだ。まるで、毎日のパンを要求するようにね。」

肩書きのない男「なるほど、それじゃ頼にさわるわけだ。」市参事会員「頼にさわる、だって。僕は党の金庫を充してやるためにお金を出している。党の方かというと、僕と僕の財産と僕の家をふきとばしてしまうという明白な目的を追求している。それを「頼にさわる」と君は言うのかい。僕の身にもなってくれたまえ。「頼にさわる」どころか、実に忌避しく、我慢ならぬんだ。」

肩書きのない男「そうかい、そうかい。でも、見方を変えて、君の息子さんが、賭事とか、酒とか、女とかに君のお金

を使うことを考えたなら、まだましではないのか。ちょっと正直になってみたら、そうはならないかい。」

市参事会員「たぶんね。」

肩書きのない男「さあ、今度はもうちょっと冷静になってみよう。この、いわゆる社会主義のために消費された金の一部が、さっきのいかかわしい費用にもなっている、というわけだ。」市参事会員「お、そんなことは断じてない。手は火の中につっこんでも受け合える。たくさん証拠がある。ちやっと見張っている。決してそんなことはない。断然自信をもっている。」

肩書きのない男「なるほどね。……やっとなんか。君は彼の将来が心配なんだ。将来君の財産が彼のものになった時、同志が彼をすっかり丸裸にしようだろうか、彼が自分でそれを窓から放り投げてしまい、遂には貧窮の淵に沈むだろうか、それは、今まで幸福な暮らしに慣れていただけに、一層つらい貧窮になるだろうかね。君の不安は、彼がいつか衰れむべき人間になり下がり、犯罪者の道に入ることなんだ。」

市参事会員、少し考えて「聞いてくれたまえ。それは大事なことだ。今までずっと不安だったことがある。一七、八の

頃の彼は、良家の生れに相応しい習慣を適度に身につけていた。虚栄と美食癖、家庭内でも不満ばかり、使用人にもつらくあたる、僕はこの若僧には手を焼いていたんだ。(突然高笑して)それがどうだ、乱行高じて、今では小間使が彼の長靴を磨くことを決して許そうとはしないのだ。全くの御乱行、御笑い草だ。新しい外套をつくらせようとしても、父親の僕は今だに彼を言いかすことが出来ない。机だつてそうだ。今までので満足している。まるで托鉢修道士だ。實際驚いてしまう。君がほのめかしたことだけど、僕はこう言えるよ。

昔は、息子は結局貧窮に慣れることも、犠牲に耐えることも出来ないだろうと心配していたんだが、今では確信しているのさ。たとえいつか彼の経済状態が人生のうちで変わることもあるとしても、すぐそれに慣れるであろうし、まるで他の生活というものを一度も知らないかのように、心軽やかに、辛い思いもせずに暮らしていけるだろう、とね。」

肩書きのない男「それは、それは。それじゃ何が不満なんだね。」

市参事会員「聞いてくれたまえ、彼は今の社会秩序を覆すために働いている。自分を危険に晒している。まちがった不運な教説に与している。そのうえ集会で発言までする。」

肩書きのない男「それだけならどうということはない。言葉は自由なんだから。」

市参事会員「そうなんだ、でも、残念ながら(こんな言い方をお許し願いたい)、君は御存知ない。彼は新聞にも書いているんだ。ただ話をするくらいなら、まだ、さしつかえはない。しかし、例の新聞にもを書くことになったら、これは駄目だ。」

肩書きのない男「全く馬鹿げている。」

市参事会員が躊躇しながら「そうなんだ。それで……というの、彼がもち出す馬鹿げた議論はひとまずおくとして、……僕が一番悩んでいるというのは、つまり、その情無い記事は僕ほとんど読まないのだが、その中には必ず何かしら立派なことが書いてあるということなんだ。彼は場ちがいなところにいる天才、とにかく天才なんだ。僕が初めてそんな記事を読んだ時は全く驚いてしまった。彼が書いたなんて信じられなかった。高等学校では特別に優れていたというわけではなかったからね。どれほど心暖まる、内容豊かなものを書いてあるか、君にも知ってもらいたいよ。威勢がいいったらありゃしない。というより、価値のある、永久に価値のある記事なんだ。そのために将来彼が責任を問われるかも知れ

ない記事なんだ。」

肩書きのない男「そんなこと悲しむには及ばないさ。君の息子さんについて僕がどう考えているかわかるかい。彼は自分の唱えている社会主義に少しも自信をもっていやしない。

他の多くの人と同じようにね。今日の若者にとって社会主義は我々の時代の叙情詩みたいなものさ。みんな一度はこの小児病を通過しなければならぬ。一過的な現象なんだ。本音は、「独創的」にみられたい、官憲に反抗して何か大騒ぎをしたいという虚栄心なのさ。僕は君の息子さんをこう考えている。彼は軽薄で移り気なんだ。君には予想もつかないだろうが、彼はある日突然、古くなった上着のように社会主義を脱ぎ捨てるだろう。」

市参事会員、気分を書しかけて「軽薄だって、移り気だって。とんでもない。君は邪推している。彼は我慢強いし、志操堅固な人間、頭の前かまらつまさきまで男らしい男なんだ。君は知らないだろうが、彼を正気にもどそうとみんな、万策をつくしてきた。友人、親戚、名士、可愛い女の子だって協力してくれた。それでも馬の耳に念仏さ。それほど頑固だった。でも、もうこの話は止めにした方がよさそうさ。僕がどれほど彼のために苦しんできたか、君にはちっともわから

ない。僕は自分が初めて人生の出発点に立っているんだというところがよくわかった。彼は行方不明の放蕩息子なんだ。」

肩書きのない男「そう、そう、今やっとわかりかけてきたぞ。彼は放蕩息子なんだ。何故かといって、彼は社会の低辺の人達と過しているし、悪いつき合いをしているとも十分考えられるからね。いろんな無頼漢を連れて帰宅するんじゃないかい。」

市参事会員「そういうことはない。もしそうなら、悪いつき合いの痕跡に僕が気づかないはずがないじゃないか。感じ方とか物腰や振る舞いとか言葉使いにね。だからそれはない。ただ、誰でも自分が偶然生れついた階級の中から友人をみつけるというのはいくらもなことで、自分の価値感にもかなっているように思うんだが、僕の息子はその反対なんだ。とんでもないことだ。想像してみてくれ。我々が二人で外出すると、道具を下げた点灯夫や上着を肩にかけたれんが工や前掛け姿の馬具師なんかに出会おうとする。そうすると、この労働者達がすれちがいき息子に挨拶をするんだ。帽子もとらずに、まるで相棒かなんかのようにね。当然彼が集会で見知った人達なんだが。」

肩書きのない男「それで君が腹を立てるのもわかるよ。」

市参事会員「いや、そんなことは気にならない。僕は古くから自由主義者、労働者に対しても自由主義者だし、階級で差別はしていない。ただ、ある種の感情というか、社会的習慣というものがあるだろう。とにかく、僕はあらゆることを経験せにやなるまいよ。こんなことがあった。ある日、我が家の暖炉を修理しに一人の労働者がやってきた。僕は指示を与えた。ところがその若僧は自分の一存だけでやろうとする。僕は自分の指示に固執した。すると彼は怒り出したんだ。僕はもう一度指示をくりかえした。彼は大声で抗弁する。事態がますます始まる。そこに息子がやってきた。彼はその場の雰囲気驚いてしまったようだ。彼はその労働者を知っていた。が、暖炉を直すのはその労働者だ、ということを知らなかった。今日は、同志、と彼が言った。正確に「同志」とね。それから二人は握手をした。僕の目の前で。信じられなかった。息子の父親がこういふ場合どんなに愉快な役割を演ずることになったか、君には想像できるかい。」

肩書きのない男「もちろん、さぞかし、その労働者は、息子さんから得た厚遇を利用して、当然ながら、君に対して有利な立場に立ったというわけだ。」

市参事会員「いや、その逆なんだ。すぐに僕に対する口調

を変えて、許しを乞いさえた。と聞いて、僕がつんぼさじきに置かれていたことにかわりはなかったがね。腹が立ったが、そこまではいい。「同志」、これはなんだ。とんでもないことだ。」

肩書きのない男「やっと君の立腹がわかったよ。君の積にさわるのは、息子さんがあいう連中につき合っていることなんだ。彼が労働者の間で人気があるということは、君の友人の手前、不名誉なことになるからね。たぶん君はつき合いのうえで不愉快なめに会ったんだろう。君の友人はこのことで君をからかいたろうし、無礼をはたらいた者もいたことだろう。「君ほど、理的に物を考え分別のある父親に、どうしてああいう息子がいるんだい」、こんな風に面と向って言われたら、実際つらかったにちがいない。」

市参事会員、突然憤慨して「まあ聞いてくれたまえ、そんなことは誰にも言われたことはない。それだけは願ひ下げにしたいものだ。僕の息子を、だまされたとか、誤った道に踏み込んだとか呼ぶぶんには一向構わない。それは僕も認める。だが、みくびった言い方をするなら、悪魔に食われてしまえだ。息子は律儀で、勇敢で、気高い人間なんだ。だからその点については誰にも何も言わせない。君も例外ではな

い。」

肩書きのない男「わかったよ。それじゃ、君が僕に語ってくれたことを一度全部まとめてみようじゃないか。君の息子さんは、新しい理想のために心を腐らせもしないし、君に対する尊敬の気持もなくてはいない。彼は、君自身で認めたように、本当に情熱的に、大事な研究に献身している。悪徳に身をもちくずすようなこともない。質素な生活にも慣れてしまっている。その点では、彼の将来がどのようなものであるにせよ、君は安心している。昔とちがって、意志も性格も強くなった。彼は人々、つまり労働者に気に入られているし、君も彼らに対して敬意を拒んではない。さあ、それではどうして君は彼を行方不明になった息子と呼んで、むしろ再会出来た息子と叫ばないのかね。」

市参事会員は跳びあがって友人の肩に手を置き、その眼をじっとみつめた。「それじゃ君は今まで僕をからかっていたのかい。もしかしたら、我々が顔を合わせなかった間に、この社会主義は遂に君の頭もくるわせてしまったのかい、どうなんだ。君も遂に社会主義者になってしまったのか。答えてくれたまえ。」

肩書きのない男は声高らかに笑って、椅子から立ち上る。

「僕が社会主義者だって。君こそくるっている。君の家族にアカが入り込んだものだから、君はどこでも赤く見えるんだ。何ということだ。さあ、もう一杯飲んで、この憂鬱をはらそうじゃないか。」(酒を注ぐ)

市参事会員、気を落ち着けて「乾杯。」

肩書きのない男、グラスを合わせて、「友よ、君の健康と君の望みがかなうように。早く、君の息子の眼から赤い被いごとれて、正気にもどり、正道にもどるように。厳肅かつ公然と脱党声明を出して、君と永久平和を回復し、そして二度とあの結社にもどることがないよう祈って。何故といって、やはりそれが君の願いであるし、それが明日だったら、君はどんなに喜ぶことだろうね。」

市参事会員は黙って腰を下し、物思いに耽りながら時計の鎖をもてあそんでいた。

肩書きのない男は彼をみつめ、笑みを浮かべ、ちょっと間を置いてから言った「君の答えを待っているんだよ。」

市参事会員、当惑して「確かにそうなんだ。つまり、脱党声明をそう厳肅かつ公然と出す必要はないだろう。ひとがもう一度正気にもどるのに、そんなに大袈裟にすることはない。

(安心したように続けて) しかし、君の言っていることは全

く不可能だよ。」

肩書きのない男「まったく、君は、答への前半よりも後半の方をうれしそうに話すんだね。」

市参事会員、いらいらしながら「君は本当に偏狭で、詭弁を弄し、杓子定規になってしまった。そうだよ。全く君が悪いんだ。息子のことなんか話さなきゃよかったよ。とにかく話題を変えたほうがよさそうだ。(その時、電気式呼鈴が鳴る。市参事会員が突然再び気弱になる。) 静かに、彼だ。我々が彼の話をしていたことは内緒だよ。今日は朝から彼とは会ってないんだ。どうしたらいいだろう。僕はいつも、彼が出かけると落ち着かず、帰ってくるかと本当にうれいんだ。何て奴なんだ。待ちなさい。今迎えに行くとところなんだから。」(あわただしく立ち去る。)

肩書きのない男、目で彼を追いながら静かに微笑む「あれで、迎えに行く、かい。まるで、迎えに走る、ではないか。(満足げに両手をこすり合わせる) 奴ときたら、実際は自分の精神状態がちっともわかってやしない。息子が行方不明になってからは、それまで以上に彼を愛し、一目置いているというのに。」

※

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(4) 氏家

デ・アミーチスは社会主義的スケッチの美しい一篇の中で、「同志」という言葉の価値をまねのできないやり方で描いている。「同志」はイタリア語でもっとも美的に情感をこめて、「コンパニーニ」compagno というが、正確に翻訳すると道連れとなるろう。

※

〔第四話〕

『同志』

この言葉を笑わないで下さい、教授。我々の行動を笑える時代は終わったのです。見識深い歴史学者である貴方がもう五〇年先に、この言葉の使用法が昔はどうであったか、それがどれほど普及したかをお調べになったとしたら、その晴れの日、貴方はその研究によって大変な名誉を手にするでしょう。

しかし貴方の笑いをさそったのは、その理念ではなく、言葉そのものだったのかも知れません。そしてたぶん、既に多くの人がそうしたように、こう尋ねたかったでしょう。つまり、我々はどうして他ならぬこの言葉を選んだのか、とね。貴方なら、友、と言いたいのかも知れません。

しかし、世界を揺り動かしている大問題で互いに争ってい

る場合でも、ひとは友になり得るものです。一方、我々社会主義は一つの町でも多数にのぼり、我々はもうこういふ名称で呼び合うことが出来ないのです。

兄弟、ですか。

この言葉では我々は互いに区別も認知も出来ません。何故なら我々にとってはすべての人間が兄弟なのですから。

戦友ですか。

これは「軍隊」の場合に使われていますが、我々の無上の願い、希望とは、決して理性以外の力、言葉以外の武器を使わないことなのです。

従って同志というのは、共に、同じ方法で同じ目標を追求し、同じ希望に胸を熱くし、同じ危険に身を晒し、常に助け合う覚悟があり、共に喜びを分かち合う人を指す我々の本当の呼び名なのです。その喜びとはすべての征服の終わった後で味わえる喜びであり、長い道のりを通して、非武装だが無敵の軍勢によってもたらされる喜びなのです。我々はその軍勢の一員であり、そこで我々は野心も、嫉妬も、特権も持たずに戦います。

我々の唯一の報酬は、真理と正義に尽力し、世界にもっと幸福な時代を準備しているのだという意識にあるのです。

しかしこのような説明では何の役に立つでしょうか、尊敬すべき教授。恋人たちにとって愛する人の名前は、他人にはわからないある秘密の意味と、他人には聞こえないある親密な響きをもつものですが、我々の同志という言葉についても同様です。貴方にその価値を説明しようとしても、結局は無駄ではないでしょうか。詩の美しさを、その言葉を解しない人に説明してやるようなものです。

学生から同志と呼びかけられた労働者、貧乏人から同志と呼びかけられた「ダンナ」、無教養人から同志と呼びかけられた教養人、老人から同志と呼びかけられた若者、初めて同志と呼ばれ、ヴェテランの友人に促されて、待ちこがれた回宗の証明をすることになった情熱的なプロバガンディスト、数え切れない難関を通過してもちこまれた紙片のかたすみに「同志」という言葉をみとめ、妻と子供にパンの心配がないとの約束に慰められる囚人、皆等しく誇りと喜びで熱烈歓迎してくれた町という町で、何千人もの聴衆に同志諸君と呼びかける演説者、未知の町にいったばかりの時、会ったこともない何人も若者に同志と呼びかけられ、この挨拶のおかげで、まるで幼友達に再会したように、いっぺんに、好意と思想的共同性の無数の絆によってつながれてしまったかのよう

に感じる人たち、こういう人たち、つまり我々だけが、この詩趣と力を感じし、数えきれない声と言葉を理解し、歌う青年たちの力強い嵐のようなざわめきとそこに含まれた同志という言葉を聞くことが出来るのです。

幼年時代、小学校時代には「友」という後の表現の代りに「遊び仲間」という言葉を使い、それでもって、金持ちの子も貧乏人の子も等しく、階級的差別意識でちつともくもらされていけない意味を表わしていました。それと同様に、例の名称を使う時には、あらためて、兄弟愛と平等に対する本能的感覚が我々の心の中に復活するのです。その本能的感覚とはかの美しき時代に独自のものであり、長い間に、次々に堆積した理念やあさましい自惚れや階級利害——階級利害は、無意識で憶病な利己主義にまでなってしまった——の山の下に埋もれてしまった感覚のことなのです。そして、この心と言葉のよみがえりについては、我々には予感のようなものがあるのです。つまり、我々には、人類が——科学と経験によって賢くなったとはいえ——いわば人類の幼年時代の生活形式や生活条件に立ちかえる時が近づいているように思えるのです。

そうです、この同志という言葉はすべてのヨーロッパの言

語に於いて新しい意味を獲得し、パリからベルリンへ、ミラノからマドリッドへ、ニューヨークからロンドンへ、ブリュッセルからシドニーへ、おそろく決して出会うこともない人々の交流で親しく使われています。

この言葉を使うときには、その敵爾かつ愛情ある響きのために、我が家のつまらない召使いに對してさえ、まるで呪文の力によるかのように、あらゆる自惚れ感情が消えうせてしまいます。或いは一瞬でも気持が激する時には、すぐさま、羞恥と悔恨の思いによってそれは封じられてしまいます。赤面の至りというわけです。この言葉を手紙の上のみつけた時、しかも、その筆跡が、大変苦労して書いたために粗野で拙ない時には一層、この言葉は美しく熱がこもっているようにみえるのです。我々にとって、この言葉は慰めと喜びの最高の、しかも最も平易な表現なのです。

こういうわけで、我々はひとに「友」という愛称を与えることも、ひとからそう呼ばれることもよしとはしないのです。が、それでも構わないわけです。袂を分かった友人の代りに、百人の同志がその溝を埋めてくれるからです。たとえこの同志達とはほとんど面識がなくとも、彼らと我々とは、親密な度合いは少ないけれども堅固で人間的な絆でむすばれていま

す。その絆は、以前のくじかれた絆よりも堅固で人間的です。我々が急ぎ通り過ぎる人々の群れの中に懇意の顔をさがす時、我々のまなざしは好んで同志の顔に注がれる。たぶん数千人の人々の中にたった一度しかみたことがなく、ほとんど面識がないのだけれども、感激した幾時間かの思い出、すべての顔に同じ理念が輝き、すべての心に同じ炎が燃え立った集会の思い出を呼びさましてくれる顔というものがある。かの言葉は、それが偶然の出会いに呼びかけられようと、表情とか言葉に表わせない微笑——そこには信頼のこもった心からの挨拶という意味があるのだが——から発するものであれ、いつも新たな喜びを我々にもたらすのです。行きずりの人の名前を知ることには何の意味がありません。彼のまなざし、彼の挨拶が我々にこう語っているのです。「僕は君の同志です。」なるほど耳には聞こえないが、非常に意味深いこの三音節には理想と共感と希望という透明な水の流れが合流しているのです。

この言葉は絶ゆることなく普及し続けています。毎年新しい数万人の人々がこの言葉を理解し把握しています。それがまだ知られていない遠く離れた町でも、その言葉は口から口へと伝わり、女性や子供達も覚え、学校にも入り込み、集会の

中を響きわたり、文学にも登場し、歴史に迫ってきています。この言葉が地球上に普及すればするほど、そして、我々の心情に深く響きわたれば響きわたるほど、我々の思想はより大きく成長し、我々の心にはより甘味なものとなるのです。それ故我々はいつも若者達に優しく説いて聞かせているのです。この言葉を尊重し、不用意に濫用しないように。それが意味すること、それが我々に命ずることをじっくり考えなさい。その言葉をいつも心にとめて、良心に従って発言しなさい。姉妹や恋人や祖父母にこう明言しておきなさい。即ち、彼らの愛する祖国の記念物や彼らの祈る神の像の前で正々堂々と語れないようなことをこの言葉は何も言わない、と。こういうことを彼らに鼓吹するだけではありません。彼ら自身でこの言葉を使い、身の回りに広めるようにと説き、それを自分のものとし、世間に向かって同志と呼びかける子供達を祝福するのです。というのも、この言葉は人類の至高の努力とキリストの至聖の律法とを統一する理想に於ける数百万の魂の共同体を表現しているからです。

これらすべてを我々は若者の心にうえつけているのです。いったん自立し、心情でも理性でも生活経験でも成熟した年齢で初めて社会主義者となった人々については、そんなこと

を言うには及びますまい。「同志」という言葉を長い間父親風の言い方で語り、子供にも子供らしい言い方で言わせてきた人は、今後それもそれを愛し、使い続けるでしょう。何故なら彼は、この言葉の鼓吹する深く、厳肅な、それでいて優しい感情をもはや忘れることはありえないでしょうから。最も信頼できる旧友や、最愛の両親でさえ、我々の理想を論難して、あの言葉がいざれ我々の口元と心から跡かたもなく消えうせてしまうよう望んだとしても、それは無駄というものでしょう。たとえ老衰や病氣や精神不調や他の悲運のために、晩年、我々が、明るく心の中に輝き続けるこの理想の、無防備で不活発な支持者たらざるを得なくなつたとしても、この言葉は、我々が人間と市民として登りつめて最高段階にある良心と人生の象徴として永久に心の中に書きとめられていることでしょう。そして、死出の旅へ立つ時、我々が血のつながりによって最も親密にむすびついた人々に最後の別れを告げた後も、我々の目は尚も、労働と闘争の美しき日々と同様、一人の友を、たった一人でもよい、同志と呼びうる人をさがし求めるでしょう。大義のために立派に活動してきた人にとつて、心から渴望された、それどころかたつた一つ、熱望された死後の名声とは、我々が同志と呼んできた人々の振る小旗によつ

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(4) 氏家

て、すべてが終るかの地へと送られることなのです。最後の別れの挨拶をもう一度、かの、我々にはこの上もなく優しく、名誉あるものと聞こえる言葉で送ってくれる人が、たとえ極貧の人であろうとも、そうなのです。その人はこう呼びかけるにちがひありません。「同志、静かに休め、我々はこの仕事を続けていく。」

※

この社会主義詩人の願いはかなえられた。一九〇八年のメーデーは曇っていたが、デ・アミーチスのむくろは、トリノの墓地へ移されるべくボルディゲラからトリノ駅に到着した。そこには、深い悲しみにうち沈んだ数千人の群集が待っていた。それは多彩な人々の集まりであった。この大都市の学校はすべて休校となり、大学生から小学校の少年少女までの学生、生徒が、デ・アミーチスの葬列に加わるべく教師に従って集まって来た。詩人や作家も混っていた。公権力の使者もやってきた。国王はこの「愛国詩人」の突然の死を悼んで、心暖まる電報を遺族の息子のもとへと送った。一中隊の兵士と多数の士官がかつての戦友の棺に従った。しかし、この葬列を顕著なものとしたのは、仕事場を離れ、赤旗を掲げて棺の後を行進した数千人の労働者であった。同志が同志

(三七三) 一〇三三

を埋葬したのである。墓地では、この町の市長、県知事、アルゼンチン領事が演説をした。しかし、最も心暖まる演説をしたのは、党と労働組合を代表したジュリオ・カサリーニであった。彼はこう語って亡き同志に別れを告げた。イタリアの労働者はこの偉大な同志を決して忘れないだろう。そして、彼を他の誰よりも優れた者たらしめた二つの資質、即ち、その固い信念と純真な性格とをみならうべく努力するであろう。